

平成二十四年六月十日発行
皇學館論叢第四十五卷第三号 抜刷

研究ノ一ト

陰陽道祭祀の一考察

— 鬼気祭・四角四堺祭を中心に —

宮崎真由

陰陽道祭祀の一考察

— 鬼気祭・四角四堺祭を中心に —

宮崎真由

□ 要 旨

小論は、陰陽道祭祀の中から「鬼気祭」に焦点を絞り、これまでに蓄積された研究史を整理しつつ、その成立と展開について再検討した。とくに、他の疫神祭との関係、成立の背景、鬼気祭の公私、鬼気祭と四角四堺祭との関係を中心に取り上げた。小論の考察によれば、鬼気祭は、陰陽道の典拠を示すことにより陰陽寮の地位を確立し、陰陽道の独自の祭祀を成立させていく過程で生まれたもので、その背景には、藤原良房と春澄善繩、陰陽師滋岳川人が関係していたと推測される。公的な鬼気祭は疱瘡に対してのみだが、私的な場合は他の病気にも行われた。公的・私的とも

に並立して行われており、時代とともに私祭化されていったとは考えにくい。また、内裏の四角において行われる鬼気祭を「四角祭」、山城国の四堺において行われる鬼気祭を「四堺祭」と称していたのであり、祭祀の性質は同じであると考えられる。

□ キーワード

陰陽師 滋岳川人 鬼気祭 四角四堺祭 疫病
藤原良房

はじめに

陰陽道研究において、陰陽道そのものや古い、祭祀に関するものなど数多くあるが、祭祀についていえば、それらは「陰陽道祭祀」という大きな枠組みの中で論じられているものがほとんどである。岡田莊司氏が陰陽道祭祀をその性格によって分類しつつ、その成立と展開をあとづけたのをはじめとして、小坂眞二氏・山下克明氏・繁田信一氏による重厚な研究がある。ただ、陰陽道祭祀を個別に検討していたものとしては、「四角祭」についての甲田利雄氏の研究と「招魂祭」についての齋藤英喜氏の研究があるのみで、その他の祭祀についてはじゅうぶんな研究が進んでいるとはいえないのが、現状である。

そこで、小論では、陰陽道祭祀の個別的な研究として、おもに「鬼気祭」を取り上げ、成立の時代背景や陰陽寮官人の動向から、さらにはその展開について考察したい。

一、鬼気祭の成立

鬼気祭については、貞観九年（八六七）正月廿六日丁卯条

〔日本三
代実録〕に、

陰陽道祭祀の一考察―鬼気祭・四角四堺祭を中心に―（宮崎）

（前略）神祇官陰陽寮言。天下可_レ憂_二疫癘_一。由_レ是。令_レ王_二五畿七道諸國_一。轉_レ讀_二仁王般若經_一。并脩_二鬼氣祭_一。

とあるのが、その初見である。これによれば、神祇官と陰陽寮が天下に疫病の憂いがあることを奏上し、仁王般若経の転読と鬼気祭が行われたことが知られる。また、同じ陰陽道祭祀である高山祭については、貞観元年（八五九）八月三日丙戌条

〔日本三
代実録〕に、

遣_二從五位下行備後權介藤原朝臣山陰。外從五位下行陰陽權助兼陰陽博士滋岳朝臣川人等_一。於_二大和國吉野郡高山_一。令_レ修_二祭祀_一。董仲舒祭法云。螟騰賊_二害五穀_一之時。

於_二害食之州縣内清淨處_一。解_レ之攘_レ之。故用_二此法_一。前年命_二陰陽寮_一。於_二城北船岳_一修_二此祭_一。今亦於_レ此修_レ之。蓋擇_二清淨之處_一。

とあり、この時、「董仲舒祭法」をもとに虫の害を祓うため、陰陽博士滋岳川人らを派遣して行われたことがみえている。

この「董仲舒祭法」は、高山祭だけでなく、鬼気祭においてもそのよりどころとされている。天承二年（一一三二）閏四月八日付けの散位中原師元の勘文〔朝野群載〕_{（卷）}には、

天下不_レ静間支

（前略）重_レ檢_二古典_一。董仲舒曰。故防_二天下之疾病_一。以_二二月八日_一。解_二祭鬼氣_一。因_レ茲永観三年三月一八日。陰

陽道勘文云。行_二宮城四角鬼氣祭_一。可_レ防_二疫病_一者。(後略)

とある。これによれば、鬼氣祭は高山祭とともに「董仲舒祭法」を典拠とした祭祀であり、どちらの初見にも陰陽寮が関与したことがうかがえる。この「董仲舒祭法」に関しては山下氏が、
① 今日董仲舒の著として伝わる「春秋繁露」の選択にもれた祭祀関係の篇目が存在した。

② この他に単独の著作が存在した。
③ 董仲舒の令名に仮託して後人が擬撰した。

とみて、これらのうちいずれかが、『董仲舒祭法(書)』(或は単に「董仲舒」としてわが国に伝えられたと考えておられる。鬼氣祭は、「神祇祭祀の疫神祭を陰陽寮へ移管したもの」と考えられているが、具体的には、

① 祭物など祭儀の主要部分は神祇を踏襲し、五行書に典拠を得て移管。(小坂氏)

② 宮廷社会の過度な穢意識の増幅とともに、神祇官人の活動が縮小されたための移管。(岡田氏)
という二つのケースが想定されている。

まず、①の小坂説という祭物だが、鬼氣祭の祭物については、鎌倉時代後期に賀茂在材が編纂したといわれ、陰陽道祭祀の作法儀礼を詳しく記した『文肝抄』につきのような記載がある。

鬼氣 灰少々 魚味 撫物无

十二座建仁元 被_レ行_二四角四堺鬼氣御祭之時支度云_一 神曆九十六前四角冊八前四堺同_レ之。

大鬼氣祭同_レ之祭文不同也。於_二門外_一可_レ行_レ之。門内

ニシテ不_二勤仕_一者也。四角四堺御祭同_レ之内裏之四角

會坂大枝龍花山崎等行_レ之者也。大鬼氣祭牛皮一枚

也。四角ト謂者内裏四角之外也。或私云。以_レ良爲_二上

首_一。

疫病に対する祭祀としては、鬼氣祭以外に「道饗祭」「宮城

四隅疫神祭」「畿内堺十処疫神祭」、陰陽寮が行う「追儺」と「四

角四堺祭」がある。このうち、「道饗祭」のことは、『延喜神祇

式」四時祭に、

道饗祭於_二宮城四隅_一祭

五色薄施各一丈。倭文四尺。木綿一斤十兩。麻七斤。庸布

二段。緞四口。牛皮三張。鹿皮。熊皮各四張。酒四斗。稻

四束。鰻二斤五兩。堅魚五斤。腊八升。海藻五斤。鹽二

升。水盆。坏各四口。榸八把。匏四柄。調薦一枚。

と規定され、また、『令集解』神祇令にも季夏と季冬に、「道饗

祭謂_二卜部等於_一 京城四隅道上_一而祭之。言飲_二令鬼魅自_一外来者不_レ敢入_二京師_一。故

預迎_二於道_一饗過也。釋云。京四方大路最極_二卜部等祭_一。牛皮并鹿猪皮用也。此爲_二鬼魅自_一外来_レ來_二宮内_一祭之。」とあり、これらの史料によって、「道饗

祭」は神祇官の卜部が宮城の四隅で疫神を饗応する祭祀である

ことがわかる。さらに、「宮城四隅疫神祭」「畿内堺十処疫神祭」

については、『延喜神祇式』臨時祭に、それぞれ、

宮城四隅疫神祭 若應_レ祭_二京_一城 四隅_一准_レ此

五色薄施各一丈六寸。等分四所。已_レ准_レ此。倭文一丈六寸。木綿四斤兩

麻八斤。庸布八段。鍬十六口。牛皮。熊皮。鹿皮。猪皮各

四張。米酒各四斗。稻十六束。鯁。堅魚各十六斤。腊二

斗。海藻。雜海菜各十六斤。鹽二斗。盆四口。杯八口。匏

四柄。榲十六把。薦四枚。藁四圍。楛棚四脚。各高四尺。長_二三尺五寸。長枋

一枝。

畿内堺十処疫神祭 山城與_二近江_一堺一、山城與_二丹波_一堺二、山城與_二摂_一城與_二伊賀_一堺六、大和伊賀_一堺七、大和紀伊_一堺八、和泉與_二和_一伊_一堺九、摂津與_二播磨_一堺十

堺別五色薄施各四尺。倭文四尺。木綿。麻各一斤二兩。庸

布二段。金鐵人像各一枚。鍬四口。牛皮。熊皮。猪皮各一

張。稻四束。米酒各一斗。鯁。堅魚。海藻。滑海藻各四

斤。雜海菜四斤。腊五升。鹽五升。水瓮一口。杯二口。匏

一柄。榲四把。薦一枚。藁一圍。輿籠一脚。枋一枝。擔夫

二人。京職差_一 係充_二之。

とあり、「宮城四隅疫神祭」は宮城の四隅において、「畿内堺十処疫神祭」は畿内の十ヶ所の堺において行われる疫神祭であることが知られる。ちなみに、「延喜式」には、鯁や堅魚・牛皮など、前述の『文肝抄』の引く鬼気祭の祭物と類似したものがいくつかみえることは注目すべきである。⁽⁷⁾

陰陽道祭祀の一考察―鬼気祭・四角四堺祭を中心に―(宮崎)

こうした「疫神祭」は、宝亀元年(七七〇)にみえるのを手初めに、以降盛んに行われており^(表)、陰陽道祭祀である

「追儺」は、神護景雲三年(七〇六)に「天下諸国疫疾、百

姓多死、始作_二土牛_一、大儺」とあるのが、その初見である

(註)日本_一 紀_二是年_一条。

「四角四堺祭」は、行われる場所や性格が「道饗祭」「宮城四

隅疫神祭」「畿内堺十処疫神祭」と類似するが、『西宮記』に、

延喜十四廿三、(中略)四界祭、陰陽寮四_二四界_一祭、四角祭、以_二禰人所人_一爲_レ使_二使所人_一、已上天下有_レ疫之時、陰陽寮進_二支度_一、料物

祭_二頭書_一上卿奉_レ勅、仰_二陰陽寮_一令_二勅_一日時奏、返_二給_一下辨、々仰_二陰陽寮_一令_二進_一支度、覽_二上卿_一、或_二奏_一任_二支度_一官_二官賜_一諸司、禰人所差_二勅使_一四角所衆名_一

人_一、件使_二陰陽師_一等職_二食_一宣_二給_一山城國_一

とあることからわかるように、「四界祭」「四角祭」ともに天

下_二に疫_一があるときに陰陽寮が行うもので、右の記事は陰陽寮が

「四角四堺祭」に関与したことを示す貴重な史料である。

前田晴人氏⁽⁸⁾は、疫病は流行する時期を確定できないものであ

り、状況に応じて臨時祭を行わなければならないという観点か

ら、「宮城四隅疫神祭」は神祭の場が一致することと神への供献

品の同類性ことから、道饗祭の臨時祭式」とみ、さらに、「これ

ら両祭祀は元来一つの祭式として存在したはずであり、神祇令

がそれを四時祭の一環に組み込んだために祭式が二つに分離さ

れることとなった」と指摘しておられる。

【表1】道饗祭・疫神祭の諸例

番号	年号(西暦)	月日	祭祀の表記	内 容	出 典
11	同 9 (八四二)	3・15	疫神祭	国司が境で疫神を防祭するように勅が下る	続日本後紀
10	同 6 (八三九)	閏1・23	疫神祭	諸国の疫病のため、郷邑で疫神を敬祭するようにと勅が下る	続日本後紀
9	承和4 (八三四)	6・22	疫神祭	時氣(疫病間發)を御すために、山城・大和・河内・摂津・近江・伊賀・丹波等の七国に使いを遣わし、境界を鎮祭す	続日本後紀
8	延暦20 (八〇二)	5・14	道饗祭		類聚三代格
7	同 9 (七七八)	3・27	疫神祭	畿内の界に於て疫神を祭り、同日には皇太子が平かでないため、大祓も行い、伊勢神宮及び天下の諸神に奉幣	続日本紀
6	同 8 (七七七)	2・28	疫神祭	疫神を五畿内に祭り、祭使を遣わす。20日に渤海使の入朝	続日本紀
5	同	8・22	疫神祭	異常な風雨により百姓が多く没したため、疫神を五畿内に祭る	続日本紀
4	同 6 (七七五)	6・22	疫神祭	疫神を畿内の諸国に祭り、祭使を遣わす	続日本紀
3	同 4 (七七三)	7・10	疫神祭	疫神を天下の諸国に祭る。6月4日に渤海使の来朝あり	続日本紀
2	同 2 (七七二)	3・5	疫神祭	天下の諸国をして疫神を祭る	続日本紀
1	宝亀元(七七〇)	6・23	疫神祭	疫神を京師の四隅、畿内十堺に祭る	続日本紀

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
寛治7 (一〇九三)	同 3 (一〇一九)	寛仁2 (一〇一八)	同 4 (一〇一五)	長和2 (一〇一三)	同 7 (一〇一〇)	同 5 (一〇〇八)	寛弘2 (一〇〇五)	同 3 (一〇〇一)	長保2 (一〇〇〇)	長徳4 (九九八)	正暦5 (九九四)	天曆4 (九五〇)	元慶4 (八八〇)	貞観7 (八六五)	仁寿2 (八五二)	同
12・29	12・20	6・20	6・20	6・20	6・20	12・13	6・20	5・9	12・29	7・5	6・27	11・20	1・15	5・13	12・26	5・27
道饗祭	道饗祭	道饗祭	疫神祭	道饗祭	道饗祭	道饗祭	道饗祭	疫神祭	春季疫神祭、夏季疫神祭 秋季疫神祭、冬季疫神祭	疫神祭	疫神祭(御霊会)	疫神祭	疫神祭	疫神祭	疫神祭	疫神祭
			疫神の託宣によって、京の民が花園の辺りに神殿を建立し、疫神を祠る					疫神を紫野に安置す	各時期の疫神祭料について	花山院と中宮の御悩と疫癘のため、諸国に疫神を祭る	疫神を北野船岡山に祀り、御霊会を行う	陰陽師は調布四端が布施され、疫神を祭る	疫神に般若経を奉じる	災疫を防ぐため、夜に佐比寺の僧惠照が行う	五畿七道諸国に勅が下る	近く物恠が有り、疫気が咎を告げるため、五畿七道諸国及び大宰府に対して疫神を敬祭する勅が下る
後一条師通記	御堂関白記	御堂関白記	百鍊抄 日本紀略	御堂関白記	御堂関白記	御堂関白記	御堂関白記	朝野群載	平安遺文	権記	朝野群載	平安遺文	平安遺文	日本三代実録	日本文徳実録	続日本後紀

これに対し、宮崎健司氏⁹⁾は四隅と衢の概念の相違から、「宮城四隅疫神祭」「畿内堺十処疫神祭」は「臨時の道饗祭」ではないと指摘されている。氏はまた、地方の疫神祭が宮城で私的に流行し、国家の威信もあり、体系的な疫神祭が公的に必要になったために光仁天皇朝に至って成立したとし、「光仁朝は前代までの仏教偏重を是正し、対疫病祭祀の創設に関しても、その原因を「疫神」と規定したのは、神祇の範疇で理解しようとしていたものと思われる」と述べておられる。

さらに、笹生衛氏は、「道饗祭」は『令義解』的（饗応）から、『延喜式』的（防衛）へと性格が変わることを指摘しておられる。すなわち、氏によれば、八世紀後半から末期をさかいて、疫神は饗応から祓へと意識が変化し、「追儺」はその性格が「追走・刑殺」であり、「道饗祭」と同様の祭物で疫神に特化した祭祀（「宮城四隅疫神祭」）が誕生したという。

こうした三氏の所説を参考にすると、「宮城四隅疫神祭」や「畿内堺十処疫神祭」は、疫病の流行に臨機応変に対処するため、神祇官管轄の臨時祭として光仁天皇朝に成立したとみるのが妥当であろう。

ちなみに、大江篤氏¹⁰⁾は、「九世紀後半になると、神祇官のうらないが、災害疾病など都合な事象の原因を「祟」に求めそれを解消させる役割を担っていたのに対し、陰陽寮のうらない

は未来に起こりうる不祥事を予知し、それを未然に防ごうとする意味合いが大きかった」ことを指摘されている。こうした大江氏の指摘を踏まえ、筆者は、疫病を予知し未然に防ぐために、陰陽寮も臨時の疫神祭（「宮城四隅疫神祭」）を行うようになり、そうした陰陽道祭祀の場合の名称が「鬼気祭」や「四角四堺祭」なのだと考える。要するに、陰陽道祭祀としての疫神祭の常設祭祀が「追儺」であり、それとはべつに、臨時祭祀として「鬼気祭」「四角四堺祭」が成立するとみるのである。

ところで、山下氏¹¹⁾は、さきの岡田氏の所論の②について、『台記』（天養二年（一一四）
（五）十二月三十日条）に道饗祭がみえる例をあげつつ、神祇の疫神祭祀がまったく行われなかったとはいえず、恒例行事が記録に残りにくい面も考えるべきではないかと述べておられる。筆者も、【表一】に示した調査結果から、「宮廷社会や神祇官人の穢意識」という理由だけでは神祇祭祀から移管されたとはいえられないと思う。神祇官では依然として「道饗祭」も行われていることを考慮すると、鬼気祭は単に「神祇官の疫神祭祀」からの移管ではなく、陰陽寮でも臨時の疫神祭を行うようにもなったと考えたほうが、諸祭祀を整合的に理解できる。疫病が流行した際の対処として、神祇では大祓、仏教では仁王会（または仁王般若経の転読）、陰陽寮としては鬼気祭（または四角四堺祭）のどれか、または複数併用して行われていることも、

こうした理解を助けるであろう。

そこでつぎに、高山祭や鬼気祭には、なぜ「董仲舒祭法」と明記されているのかについて考えてみたい。

山下氏は「外来の祭祀を採用する場合、その修法の次第や功德を記した経典類の請求が前提となり、それが存在して初めて正式な修法として承認されるが、陰陽道の祭祀についても同様であった」とみておられる。そして、氏によれば、陰陽道の「典籍について従来さほど問題にされなかったのはその多くが早くに逸し、断片的な佚文を残すのみであった」からだという。

祭祀に典拠があるのは当然かもしれないが、神祇祭祀との違いを明らかにするためにも、あえて陰陽道祭祀の典拠を明確にする必要があったのだと思う。この点については、斎藤氏¹³も、「平安時代初期の陰陽寮官人の任務は僧侶や神祇官の補完、代行・共同執行といった色彩が強く、僧侶や神祇官人にはできない陰陽師独自の祭祀法を神祇官のものとの差異化するために典拠を求めた」と考えておられるが、斎藤氏の見解を敷衍していえば、疫病対策の祭祀は、疫神に対して食物を献ずるという性格上、祭物が類似するので、陰陽道祭祀としてのオリジナリティをより一層明確にするためにも、典拠を用いて神祇祭祀との差異化を図り、陰陽寮が主催することを明確に打ち出す必要があったのであろう。

陰陽道祭祀の一考察―鬼気祭・四角四堺祭を中心に―(宮崎)

ところで、すでに山下氏や増尾伸一郎氏も指摘しておられるように¹⁴、高山祭の初見にもその名のみえる滋岳川人が、鬼気祭にも関与していた可能性が考えられる。筆者もこの点については同感であるが、川人が貞観期の陰陽寮を代表する実力者であったことは、以下の諸点からも明らかである。

①川人の初見は斉衡元年(八五四)で、この時に刀岐直ははじめて滋岳朝臣の姓を賜った。

また、初見ですでに陰陽博士の地位に就いており、最終的に陰陽頭を務めた【表2】。

②川人は貞観十六年(八七四)に没しているが、彼の卒伝から『世要動静經』『指掌宿曜經』『滋川新術通甲書』『金置新注』と多くの書物を著していたことが確認できる。中村璋八氏¹⁶は、「川人の著した書物は、日本で初めて編纂されたオリジナルな占術のテキストである」と、村山修一氏は著書の書名から「彼独自の日本的陰陽道が形成されていたことを感ぜしめる」と指摘されている¹⁷。

③『今昔物語集』(巻第二十四「慈岳川」人被追地神語第十三)には、「世に並無キ者也」

「川人止事無キ陰陽師ナリ」と記されており、陰陽道に造詣が深かったことが世間にも認識されていた。

④『今昔物語集』の評価を裏付ける史料に『左経記』がある(長元元年四月五日条)。「(前略)参「関白殿」、令「御」覽故滋岡川人

奉持太一式盤二枚、陰一枚、陽一枚、件盤前年陰陽頭文高語次云、故川人太一式盤、(中略)是靈驗物也、(中略)無止之靈物也、(後略)と、川人の使っていた式盤が後世靈物視されていた。⁽¹⁸⁾

また、川人は国史に登場して以降、高山祭と五龍祭⁽¹⁹⁾に関わっているが^(参照)、初見ですでに陰陽博士だから、それ以前から陰陽寮で活動していたのであろう。

【表2】滋岳川人略年表

年月日未詳	年号(西暦)	月日	事柄	官職	出典
同	齊衡元(八五四)	9・5	滋岳朝臣を賜う	正六位上陰陽権允兼陰陽博士	日本文徳実録
同	同 2(八五五)	1・7	叙位	外従五位下	日本文徳実録
同	天安元(八七五)	12・9	叙位	外従五位下陰陽権助兼陰陽博士	日本三代実録
同	同 2(八五八)	9・2	山城国葛野郡田邑郷眞原岡を大納言安倍安仁等と山陵地に定める	同	日本三代実録
同	貞観元(八五九)	8・3	高山祭を行う	外従五位下陰陽権助兼陰陽博士	日本三代実録
同	同	11・19	叙位	従五位下陰陽権助兼陰陽博士	日本三代実録
同	同 3(八六一)	1・13	任官	従五位下行陰陽権助兼陰陽博士、播磨権大掾	日本三代実録
同	同 5(八六三)	2・1	高山祭を行う	同	日本三代実録
同	同 7(八六五)	1・27	任官	従五位下行陰陽権助兼陰陽博士、播磨権介	日本三代実録
同	同 8(八六六)	12・29	任官	同、次侍従	日本三代実録
同	同 16(八七四)	1・15	任官	従五位上行陰陽頭兼陰陽博士、安芸権介	日本三代実録
同	同	5・27	滋岳川人卒	同	日本三代実録
同	同	同	五龍祭を勤める	陰陽師	江談抄

彼は、陰陽寮のトップである陰陽頭として祭祀に関わっていたのではないが、当時の陰陽頭は藤原氏、なかでも恵まれぬ環境にある人々が就任しており、おもに大学寮出身者や貴族官僚によってその職が担われていたから、⁽²⁰⁾陰陽寮内で技術面のトップは川人と考えてよいであろう。そして、彼の下には、技術系の陰陽寮官人として、笠名高・日下部利貞・弓削是雄らがいたのであり、鬼気祭は、滋岳川人をはじめとする、こうした陰陽寮官人の存在があつてはじめて成立しえたのである。

ここでいま一つ見逃せないのは、鬼気祭が記録にあらわれる時期と、藤原良房が摂政として権力を握っていた時期が重なることである。そのため、陰陽道と藤原良房の関わりについてもみておく必要があるが、この点に関する先行研究をまとめると、以下の三点となる。

- ① 儒教的理念（嵯峨天皇の立場）では、災害や怪異は為政者の不徳への戒め（政治責任の問題）となる。そこで、災害や怪異を神やモノの祟りとするにより、支配の安泰のために祭礼や祈祷を行えばよく、卜占によって明らかとなった祟りは為政者の政治責任論を回避する理論となる。⁽²¹⁾
- ② 文徳朝では、些細な出来事でも卜占の材料とする藤原氏の方針に便乗し、陰陽師は職掌を拡大しようとした。
- ③ 良房の陰陽道に基づく思想への関心の高さは並大抵ではない。⁽²²⁾

陰陽道祭祀の一考察―鬼気祭・四角四堺祭を中心に―（宮崎）

先学が指摘しておられる陰陽道と良房を結ぶ史料は、次の二つである。

(a) 嵯峨天皇の周忌齋会の対応 〔純日本後紀〕承和十年（八四三）七月十四日条

七月十五日は嵯峨天皇の一周忌齋会を催す日にあたるが、十五日は仁明天皇と橘嘉智子の本命日にあたるため避けるべきだ、という議論が起り、良房らの議定により十四日に行われることとなった。

(b) 嵯峨天皇の遺誠に対する議論 〔純日本後紀〕承和十一年（八四四）八月五日条

良房らは、「嵯峨天皇は物怪がある」とに先霊の祟りだといふのは、いわれなきことであると仰せられたが、占つてみると先霊の祟りと明らかにため、遺誠といえども改めるのがよいのではないかと朝議にかけて賛同を得、「怪異の卜占は朝廷公認」となる。⁽²³⁾

こうした良房と陰陽道を結ぶ人物としては、「物怪過敏症」⁽²⁴⁾「陰陽家以上の禁忌信奉者」等と評されている春澄善繩をあげることができよう。善繩については多田圭介氏の詳細な研究があるため、詳細はそちらに譲るが、両者のつながりに関して、筆者も氏の指摘のとおりだと思ふ。

また、大江氏は、「良房のブレーンを務めた春澄善繩、菅原是善は播磨国を中心に活躍する陰陽寮官人たちと何らかのつながりを持っていた」と述べ、川人・善繩・是善が同時期に播磨

国の役人であつた点に注意を向けておられる。たしかに、「播磨国」がこの二人を結ぶ要因の一つであつたことは認めてよいであろう。ただ、川人・善繩はともに逢任であつたから、「播磨国」を介した繋がりはさほど強いとはいえない。

山下氏によれば、²⁶⁾当時の文章博士には、怪異や物怪を信じる春澄善繩や三善清行と、儒教的合理主義に基づく都良香や菅原道真と、二通りのタイプがあつたというが、こうした指摘を参考にすると、「良房主導で行われた物怪の卜占化」のために、紀伝道の春澄善繩や菅原是善が登用され、同時に、陰陽道の滋岳川人らが抱え込まれたとみてよいであろう。いっぽうの川人にしてみれば、良房を後ろ盾として、今後増加していく陰陽道祭祀の成立の足がかりとすることを目論んでいたのかも知れない。

二、鬼気祭の展開

繁田氏²⁶⁾によれば、平安貴族は、疫病は「疫神」という神のものにとらえており、「疫鬼」という鬼がもたらすものとする病気として扱われていたという。こうした観念が存在したことは、三行清行著とされる『善家異記』（政事要略巻七十、乱彈雜事、無番厭魅及巫覡）に、「有裸鬼持椎。向二府君臥處。」（有二鬼一持椎。打一

府君侍見之首」。(中略) 湏臾此兒熱。頭痛毒惱尤甚。(中略) 得_レ祭之後。歡喜無_レ極。(中略) 是日。源見病癒。」とあることから明らかである。ここには、鬼が人間の身体を叩くことによつて病気になることが示されており、鬼が病人から離れると回復するとされている。

それでは、鬼気祭は、実際、どのような時に行われていたのだろうか。

『日本紀略』延喜十四年(九一四)十月十六日条に、「(前略) 戌刻。於_二建禮門前_一有_二鬼氣祭事_一。爲_二除_二砲瘡_一也。日来主上不豫。民間砲瘡轉發。」とあり、坊間に流行していた「砲瘡」を祓うために行われたことがわかるが、砲瘡以外の流行病に対して行われた事例もある。たとえば、『小右記』治安三年(一〇三三)十二月廿二日条には、藤原経任が風病を煩つており、翌日条には「(前略) 早且小女渡_二西隣_一、依_二拾遺悩煩_一、晚景向_二西隣_一、入_二夜歸_一、小女宿_二西隣_一、令_二立願_一、可_レ奉_レ願等如來、等身六觀音、可_レ奉_レ讀_レ孔雀經、今夜以_二交_二充朝臣_一、令_二行_二鬼氣祭_一、依_二古所_一行也。(後略)」とあつて、経任の風邪に対して行われたことがみえている。この場合、経任の風邪に対する治療として行われたのか、小女(実資の女)が経任に接触していたことで、さらになる風邪の拡散を防ぐために行われたのかは不明だが、いずれにしても風邪が原因であることにまちがいない。

してみると、鬼気祭には「公的」な性格のものと、「私的」な性格のものとがあることになる。そこで、以下、この二種の鬼気祭について考えてみたい。²⁷⁾

先にもみたように、延喜十四年(九一五)十月十六日条では、世間で疱瘡が流行している際に鬼気祭が行われた。これは、いうまでもなく公的に行われた鬼気祭の例である。さらに、天曆元年(九四七)八月十四日条では、

日來朱雀院。中宮。太政大臣。左右大臣家嘯名僧。或令轉讀讀般若經。或令演說仁王經。依施施施施施也。是日。於於建禮門前修修修鬼氣祭。

とあって、朱雀院らが疱瘡を煩っているため、大般若経や仁王経の転読とともに建礼門前において鬼気祭が行われている。この数日前には「京中煩疫癘施瘡」(『日本紀略』天曆元年(九四七)七月十九日条)という記事がみえ、翌日には「爲爲攘除施瘡」。於於紫寝殿。建禮門。朱雀門三箇所有二大祓」。(『日本紀略』天曆元年(九四七)八月十五日条)とある。この他にも疱瘡に対する記事が多々見られることから、当時疱瘡が流行していたことは疑いの余地がなく、この場合も、疱瘡のため、公的に鬼気祭が行われたとみてよいであろう。

甲田氏は「鬼気祭は国祭として営まれ、建礼門前の一カ所で修祀される祭であり、疫癘の中でも、主として施瘡を対象としている」とし、岡田氏も「疫癘・施瘡を鎮める国家祭祀」と位

置付けておられる。また、甲田氏は、「鬼気祭は何時の頃から私祭されるようになったかは分明でないが、延喜・天曆の頃を下限として」私祭化されていたと述べ、岡田氏も、「鬼気祭独自では行われなくなり、平安後期には私祭として祀られるようになる」と述べておられる。

しかしながら、**【表3】**に示したように、寛仁四年(一〇二〇)四月十三日条には、「依御御惱、於四陣被行行鬼氣御祭事」とあって、後一条天皇の御病気のために鬼気祭が行われている。この年は疱瘡が流行した年であり、この場合の鬼気祭も公的に行われたものである。さらに、長元三年(一〇三〇)六月七日条に、「爲祈時行、可被行行京極五箇日所鬼氣祭事」という事例がある。これは小記目録の「天下病事」という分類に記されていることから、公的な鬼気祭とみてよいであろう。ほかにも「今夜公家於五个處被行行鬼氣祭、羅城門・京極四角云、」(『長元三年(一〇三〇)六月九日条』(五)十二月廿七日条)という記事や、「於内裏諸門有鬼氣祭」(『天治二年(一一二二)六月九日条』(五)十二月廿七日条)という例もあり、いずれも公的な鬼気祭である。

こうしてみると、公的な鬼気祭は平安後期まで行われているのであって、私祭に転化していったとは断定できない。

【表3】鬼気祭・四角四堺祭の諸例

番号	年号(西暦)	月日	祭祀の表記	内容	公・私	典拠
17	寛弘元(一〇〇四)	6・8	鬼気祭	前日より続く藤原道長の頭痛のため	私	御堂関白記
16	長保元(九九九)	9・16	鬼気祭	求食鬼が原因で実資が病のため	私	小右記
15	同 4(九九三)	6・4	鬼気祭	家中悩煩ため、陳泰が行う	私	小右記
14	正暦元(九九〇)	7・8	鬼気祭	藤原実資女が病のため、陳泰が行う	私	小右記
13	永延2(九八八)	7・4	鬼気祭	藤原実資女が病のため、安倍晴明が行う	私	小右記
12	永観3(九八五)	3・18	宮城四角鬼気祭	天下に疫病がある際	公	朝野群載
11	天元5(九八二)	4・12	鬼気祭	陰陽師奉(縣)平が行う		小右記
10	天延2(九七四)	2・13	四角祭	陰陽寮が奉じ、藏人所を使いとする	公	天延二年記
9	天徳元(九五七)	5・18	四堺祭			日本紀略
8	同	12・10	大宮四隅京四隅祭	御体御卜で、来年の春夏に鬼気の崇りと出たため、季初に行われる	公	類聚符宣抄
7	天暦6(九五二)	6・23	鬼気祭	今月27日、郊外の四所にて	公	朝野群載
6	同	8・22	四角祭、四隅・四界等祭			真信公記
5	天暦元(九四七)	8・14	鬼気祭	疱瘡流行のため、建礼門前にて	公	日本紀略
4	承平元(九三一)	2・12	四角祭			真信公記
3	同 15(九一五)	10・16	鬼気祭	疱瘡の流行のため、建礼門前にて	公	日本紀略
2	延喜14(九一四)	12・3	四界祭、四角祭	疫のあるときに行う	公	西宮記
1	貞観9(八六七)	1・26	鬼気祭	天下に疫病の憂い	公	三代実録
					公・私	典拠

37	同 4 (二〇二七)	6・16	鬼気祭	胸病・頭風のため、中原恒盛が行う	私	小右記
36	同 2 (二〇二五)	8・10	鬼気・火等祭	赤班瘡のため、宣旨が下る	公	小右記
35	万寿元 (二〇二四)	12・6	当季鬼気祭	惟宗文高が北門にて行う	私	小右記
34	同	12・23	鬼気祭	夜に交充朝臣が行う		小右記
33	同	12・17	四角祭			日本紀略
32	同	12・2	当季鬼気祭	惟宗文高が北門にて行う	私	小右記
31	治安3 (二〇二三)	7・17	当季鬼気祭	夜に惟宗文高が西門にて行う	私	小右記
30	同	12・3	四角四堺祭	疫癘のため		小右記
29	同	6・19	四角四堺御祭	祭料を奏す	公	左経記
28	同	6・17	四角四堺祭	陰陽寮が日時を勘ず	公	左経記
27	同 4 (二〇二〇)	4・13	鬼気祭	後一条天皇の御悩のために四陣において行う	公	小記目録
26	寛仁2 (二〇一八)	3・10	宮城四角祭			日本紀略
25	同 5 (二〇一六)	4・8	四角御祭	夜、四角御祭を行わず		御堂関白記
24	同	5・29	鬼気祭	家の門にて	私	御堂関白記
23	同	5・9	四堺祭			小右記
22	同	5・6	四角祭	安倍吉平が枇杷殿の四角にて行う		小右記
21	同	4・28	四角・四界祭	日時を奏す		御堂関白記
20	同 4 (二〇一五)	4・27	四角四堺祭	賀茂光榮の奏上により行う		小右記
19	同 3 (二〇一四)	2・29	四角四堺祭	疾疫のため、一昨日に行う		小右記
18	長和2 (二〇二三)	8・13	当季鬼気祭	夜に惟宗文高が西門にて行う	私	小右記

55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	
同 3 (一一七三)	同	承安元 (一一七一)	天治2 (一一二五)	嘉承元 (一一〇六)	同 3 (一一〇六)	長治2 (一一〇五)	同	康和5 (一一〇三)	嘉保元 (一〇九四)	寛治7 (一〇九三)	嘉応2 (一一七〇)	同	同	同 4 (一〇三一)	同 3 (一〇三〇)	同	長元元 (一〇二八)	
3・5	10・23	10・10	12・27	4・12	2	2・21	3・26	3・25	11・18	3・8	7・5	7・14	2・29	2・23	6・9	6・7	12・22	
土公鬼気祭	鬼気祭	鬼気御祭	鬼気祭	四角四堺祭	宮城四角坤方鬼気等御祭	宮城四角巽方鬼気等御祭	四堺祭	四角祭	四界御祭	四堺御祭	鬼気土公等祭	四堺御祭	当季鬼気祭	四堺祭、四角祭	鬼気祭	鬼気祭	鬼気祭 当季鬼気祭	
安倍時晴が行う	女院の御不予のため、この日より三ヶ夜、 九条兼実の病のため行う	高倉天皇の御咳病のため、去夜安倍泰親が行う	疱瘡流行のため、内裏の諸門にて行う	天下に疾疫あり				夜に行う	夜に行う	瀧口四人を遣わす		官人を四堺御祭所に遣わす	為高の病のため、北門にて中原恒盛が行う	先に四角祭を行う	惟宗文高の申し出(疫病流行)により、羅城門と京極の四角にて行う	天下の病事のため、京極の五か所にて行う	良円のために、中原恒盛が河原で行う	内裏の穢れのため、惟宗文高が行う
私	私	公	公	公	公	公						公	私		公	公	私	
玉葉	玉葉	玉葉	百鍊抄	永昌記	朝野群載	朝野群載	中右記	中右記	中右記	中右記	玉葉	小右記	小右記	左経記	小右記	小記目録		小右記

56	同 4 (二一七四)	5・8	土公鬼氣祭	安倍時晴が行う	私	玉葉
57	安元3 (二一七七)	2・22	四堺鬼氣御祭	高倉天皇の御不子のため、竜花・会坂・山崎・大枝の四か所で行う	公	壬生家文書
58	治承5 (二一八一)	2・6	土公鬼氣祭	姫の病のため	私	玉葉
59	同	2・7	土公鬼氣祭	姫の身体に赤い小さな瘡が出たため、漏刻博士賀茂憲成が行う	私	玉葉
60	同	2・8	土公鬼氣祭	内蔵助安倍晴光が行う		玉葉
61	養和元 (二一八一)	10・21	土公鬼氣祭	女房に土公鬼氣等の崇りがあるため、漏刻博士賀茂憲成が行う	私	玉葉
62	文治3 (二一八七)	2・13	土公鬼氣御祭	後鳥羽天皇の不快のため行う	公	玉葉
63	同	5・29	四角四堺御祭			玉葉

つぎに、私的に行われた鬼氣祭に目を転じてみよう。

甲田氏や岡田氏の指摘にもあったように、私的に行われた事例も多々確認できることは事実である。私的な鬼氣祭の初見は、永延二(九八八)七月八日条である。また、長保元年(九九九)九月十六日条には、「所_レ悩自_レ曉頗宜、以_二光榮朝臣_一令_二占勘_一、云、求食鬼之所_レ致也者、仍今夜行_二鬼氣祭_一」とあって、求食鬼が原因で行われたことがみえている。同十四日条には、「心神和亂、身熱辛苦、依有_二風病疑_一」とあり、実資が数日前から風邪を煩っていたことが知られるので、これが私的に行われたことは明白である。

陰陽道祭祀の一考察―鬼氣祭・四角四堺祭を中心に―(宮崎)

このほかにも、萬壽四年(二〇二七)六月十六日条には、「(前略)爲_二侍從_一令_二王_中恒盛_中行_中鬼氣祭_上、侍從胸病頭風競起、辛苦無_レ極、(後略)」とあり、侍從の頭痛等に対しても行われたことがみえている。さらに、長元元年(二〇二八)十二月廿二日条には、

内裏穢引來、然而内裏穢時被_レ行仁王會_一、仍所_レ行也、當季仁王講_{念賢・智照・慶範}當季修法_{不動調伏法、阿闍梨々々}、當季鬼氣祭、文高、左兵衛督語、今夕以_二恒盛_一於_二河原_一爲_二内供良圓_一、令_レ行_二良圓_一令_レ行_二鬼氣祭_一、漸復_二尋常_一、令_レ聞_二案内_一、似_二時疫_一、智照云、故永源重病煩時行者、病之間有_二時疫

氣^一坎、頼秀闇梨扶^二持故永源^一、行^二雜事^一、日來重煩^三時疫^一、秘而不漏、去夕万死一生云々

とあって、内裏の穢れに対して「当季の鬼気祭」が、良円のためには鬼気祭が行われた記録がある。「当季の鬼気祭」のほうは、公的な鬼気祭である可能性も捨て切れないが、良円のための「鬼気祭」は明らかに私的な鬼気祭である。

以上の点から、私的に行われる鬼気祭は、公的な鬼気祭のように痲瘡に対してだけではなく、風邪等に対しても行われたとみてよいであろう。「当季の鬼気祭」は、【表3】からも確認できるように、この時だけのものではなく、長和二年（一〇一三）八月十三日条には、「今夜當季鬼気祭、文高、西門」とあって、惟宗文高という人物が行っている例がみえている。文高は、陰陽頭の職にあり、陰陽寮官人が貴族の私的な鬼気祭に関わっている例だが、文高以外にも、実資邸で行われた鬼気祭には陰陽屬中原恒盛という陰陽寮官人も携わっている（長元四年（一〇三二）二月廿九日丙午条）。「当季の鬼気祭」は「当季」という表現から、疫病流行の際に臨時に行われるものではなく、一定の時期に予防的に行われるものかとも考えられるが、事例が少ないので、これ以上の言及は控えたい。

さて、このようにみていくと、鬼気祭は公的としても私的としても並立して行われているのであって、時代とともに公的祭祀

から私祭へと転化していったとは考えがたい。史料的には、「小右記」や「御堂関白記」など藤原氏のものを中心なので偏りのあることは否めないが、鬼気祭は公的・私的ともに存在していたとみてよいのではあるまいか。それゆえ、あえて公私の区別をつける必要はない、というのが筆者の結論である。

三、鬼気祭と四角四堺祭

ところで、「鬼気祭」と似た性格の祭祀に「四角四堺祭」がある。宮城の四隅で行われる「四角祭」と、山城国の四堺で行われる「四堺祭」とが別々に行われる場合もある。四堺祭に関しては、「朝野群載」^{（卷十五）}_{（陰陽道）} につきのような記載がある。

右辨官下 山城國

和邇堺

使 蔭子橘兼舒 從三人 陰陽允中原善益

從三人

祝 小屬秦春連 從三人 奉禮 陰陽師布留滿樹

從二人

祭郎 學生四人 從一人 左衛門府生美努定信

從二人

看督長一人 從一人 火長一人

會坂堺 同前 大枝堺 同前 山崎堺 同前

右今月廿七日爲_レ祭_二治郊外四所鬼氣_一。差_三件等人_一宛_レ使發遣者。國宜_三承知。依_レ例供給_一。官符追下

天曆六年六月廿三日 大史阿蘇宿禰

右大弁藤原朝臣

岡田氏によれば、四角祭は『延喜神祇式』に規定する宮城四隅疫神祭と類似したものが、四堺祭は『延喜神祇式』の畿内堺十处疫神祭とはちがひ、山城国四所に限定されており、兩祭は十世紀初頭に陰陽道祭祀として新たに設定されたという。

『禁秘抄』には、「(前略)陰陽師御祭祓。(中略)四界御祭。所衆瀧口各四人爲_レ使。八人也。(後略)」とあって、四界祭は陰陽寮の管轄であるとする。これに対して、『公事根源』には

(「修正公事根源新釋」)、「道饗祭」是は疫神の祭なり。(中略)鎮火道饗の祭をば、四角四堺の祭と申すなり」と鎮火道饗祭Ⅱ四角四堺祭

という解釈を示している。しかし、【表3】にあげた事例からも明らかのように、「四角四堺祭」という名称で行われる場合は、陰陽寮が関わっている場合が圧倒的に多く、また、四角と四堺に派遣されるのが陰陽寮官人なので、そこから判断すると、「四角四堺祭」は陰陽道祭祀と考えて間違いないであろう。

この四角四堺祭は、長和四年(一〇一五)四月廿七日条に、「(前略)高山・海若并四角・四堺祭事、依_二光榮朝臣上奏_一所_レ

陰陽道祭祀の一考察―鬼氣祭・四角四堺祭を中心に―(宮崎)

被_レ行也」とあるように、同時に行われる場合が多い(表3)。

また、宮城の四隅以外で行われた事例もあることは、注意をひく。たとえば、長和四年(一〇一五)五月六日条には「(前略)今夜吉平奉_二仕四角祭_一、枇杷殿四角者」とあって、枇杷殿で

安倍吉平が四角祭を行ったことがみえている。枇杷殿は、藤原道長と二女妍子の邸宅とされる屋敷だが、長和三年二月九日には内裏が焼亡したため、四月に三条天皇が枇杷殿に遷御されている。したがって、この場合も、場所は内裏の四角ではないが、天皇のいる場であることには変わりないのであって、通常の四角祭と同じ性格のものとみてよいであろう。

さて、鬼氣祭と四角四堺祭は、平安末期になると「四角四堺鬼氣祭」などと称されるようになる。【表3】にも示したように、四件確認できる。両者の関係については、(一)四角四堺祭に鬼氣祭が吸収されていったとする説と、(二)鬼氣祭を四か所で行う場合を四角祭(または四堺祭)と称すとする説とがある。

岡田氏は、鬼氣祭が四角四堺祭と合流し吸収されていくとし、甲田氏は、鬼氣祭と四角四堺祭はともに疫癘鬼を祀るものであり、本来別祭であったものが、後には四角四堺鬼氣御祭と呼ばれ、一つにまとめられたとみておられる。さらに、小坂氏は、四角四堺祭と鬼氣祭を分ける必要はなく、四角四堺祭は鬼氣祭を宮城の四隅と山城国四堺で行う際の呼称であるといい、

繁田氏も同様の見解である。

そこで、いくつか事例をみながら、諸説の是非を検討したい。

まず、寛仁四年（一〇二〇）四月十三日条には、「依_レ御惱_一、於_二四陣_一被_レ行_二鬼氣御祭事_一」とあつて、後一条天皇の御惱のために四陣、つまり四か所で行われており、長元三年（一〇三〇）六月九日条には、「(前略)今夜公家於_二五个處_一被_レ行_二鬼氣祭_一、羅城門・京極四角云、」とあつて、羅城門と京極の四角、すなわち京の端の四か所において行われている。さらに、『朝野群載』には、

四角四堺祭使等歴名

陰陽寮

進_下供_二奉宮城四角巽方鬼氣等御祭_一 勅使已下歴名上事

勅使栗田憲景

祝頭賀茂朝臣成平

奉禮小屬伴知宗

祭郎陰陽頭大中臣爲實

陰陽得業生清原親光

陰陽生高階季保

右今日戌時。供祭歴名。注進如_レ件

長治二年二月廿一日 祝從五位上行頭兼陰陽博士賀茂朝

臣成平

勅使正六位上栗田朝臣憲景

という記事がみえているが、ここにいう「宮城四角巽方鬼氣等御祭」は、宮城の四角の巽（南東）の方角において行われる鬼氣祭のことである。そういえば、さきに引いた中原師元の勘文にも、「宮城の四角において鬼氣祭を行う」とあった。

こうした史料をみるかぎり、鬼氣祭が四角四堺祭に吸収されていったという想定はむずかしく、むしろ、内裏の四角で行う鬼氣祭を「四角祭」、山城国の四堺で行う鬼氣祭を「四堺祭」と称していたとみるべきはあるまいか。しかも、『表3』の事例から、鬼氣祭と四角四堺祭が並行して行われていることはもはや疑いなのであつて、鬼氣祭が四角四堺祭に合流し吸収されていくとは到底考えられないのである。そして、『西宮記』や『朝野群載』には、「四角祭」「四堺祭」には藏人所の官人が差遣され、陰陽寮からは陰陽師が派遣されていることがみえているので、両者はともに公的な性格の祭祀であつたと判断してよからう。

おわりに

以上、小論では鬼氣祭について、その成立から展開、さらに四角四堺祭との関係の三点にわたって考察を加えてきた。簡単

にまとめておくと、鬼気祭は、陰陽道の典拠を示すことにより陰陽寮の地位を確立し、陰陽道独自の祭祀を成立させていく過程で生まれたもので、その成立には、陰陽道を政治に利用する藤原良房、そのブレーンであり陰陽道に造詣の深い春澄善繩、そして当代随一の陰陽師滋岳川人が関与していたと推測される。

鬼気祭そのものは、性格上、公的なものと私的なものに分けて考えられるが、私的に行われる鬼気祭は、公的な鬼気祭のように痲瘡に対してではなく、風邪などの病気に対しても行われている。さらにいえば、公的な鬼気祭も私的なそれと並立して行われているのであって、時代とともに私祭化されていったとは考えにくいのである。

なお、小論では、鬼気祭と四角四堺祭の関係についても言及したが、卑見によれば、内裏の四角において行われる鬼気祭を「四角祭」、山城国の四堺において行われる鬼気祭を「四堺祭」と称したのであって、祭祀としての性質は同じであると考えられる。

小論は、従来、陰陽道祭祀または疫神祭としての研究の枠組みの中で大まかに論じられてきた鬼気祭を、一つの祭祀として体系的に論じることをねらいとしたが、陰陽道祭祀研究に資するところがあれば幸いである。鬼気祭と他の陰陽道祭祀とのかわりなど、残された課題も少なくないが、紙幅も超過したの

陰陽道祭祀の一考察―鬼気祭・四角四堺祭を中心に―(宮崎)

で、ひとまずここで擱筆したい。

【注】

(1) 岡田莊司氏「陰陽道祭祀の成立と展開」(『平安時代の国家と祭祀』続群書類従完成会、一九九四年)以下、本文中における氏の所見は全てこれに拠る。

(2) 小坂眞二氏「陰陽道の成立と展開」(『古代史研究の最新線』四、雄山閣出版、一九八七年)以下、とくに断らない限りこの論文とする。

(3) 山下克明氏『平安時代の宗教文化と陰陽道』(岩田書院、一九九六年)以下、とくに断らない限りこの論文とする。

(4) 繁田信一氏『陰陽師と貴族社会』(吉川弘文館、二〇〇四年)

(5) 甲田利雄氏「四角祭考」(『陰陽道叢書』四、名著出版、一九六八年)以下、本文中における氏の所見は全てこれに拠る。

(6) 斎藤英喜氏「招魂祭」をめぐる言説と儀礼―陰陽道祭祀研究のために―(『鷹陵史学』三十七、二〇一一年)

(7) 笹生衛氏は考古学の視点から「鬼気祭においては饗応用の食器がその祭具の中心をなす」とされ、十世紀以降一般

化する皿形人面墨書土器が対応すると提示されている。
〔奈良・平安時代における疫神観の諸相〕『平安時代の神社と祭祀』国書刊行会、一九八六年）以下、本文中における氏の所見は全てこれに拠る。

(8) 前田晴人氏「古代国家の境界祭祀とその地域性(上)」『続日本紀研究』二二五号、一九八一年

(9) 宮崎健司氏「奈良末・平安初期における疫神祭祀」(『日本古代の社会と宗教』、龍谷大学仏教文化研究所、一九九六年)

(10) 大江篤氏「陰陽寮と「崇」」(『日本古代の神と霊』臨川書店、二〇〇七年) 以下、本文中における氏の所見は全てこれに拠る。

(11) 山下氏「陰陽道叢書」一収録論理解説、(名著出版、一九九一年)

(12) 例えば、鬼気祭の初見で仁王般若経の転読が併用されているなど、その他事例は多々存在する。

(13) 斎藤英喜氏「安倍晴明—陰陽の達人なり—」(ミネルヴァ書房、二〇〇四年)

(14) 山下氏 a 「陰陽道の成立と儒教的理念の衰退」(『古代文化』五十九(二)、二〇〇七年)、同氏 b 「陰陽道の発見」(NHK出版、二〇一〇年) や、増尾伸一郎氏「鬼神を見

る者『今昔物語集』の陰陽師関係説話考」(『ケガレの文化史—物語・ジェンダー・儀礼』森話社、二〇〇五年)

(15) 増尾氏は、「陰陽寮奏言。使_下 諸國郡及國分二寺」。據「陰陽書法」。毎年鎮_中 灾氣。從_レ之。」(『日本文化史録』仁壽三年(八五三)十二月八日甲子条)

という記事を挙げ、この功績による賜姓であると指摘されている(増尾氏論文注(14))。この賜姓記事の後、刀岐直永継等姉妹五人も滋岳朝臣の姓を賜っている(『日本文化史録』貞觀。六年八月十七日辛未条)。

また、延喜十七年(九一七)十一月一日には陰陽助滋岳惟良が存在する(『平戸記』仁治元年(閏十月二十二日条))。

(16) 中村璋八氏『日本陰陽道書の研究』(汲古書院、一九八五年)
(17) 村山修一氏『日本陰陽道史総説』(塙書房、一九八一年) 以下、本文中における氏の所見は全てこれに拠る。

(18) 『続古事談』(新日本古典文学大系本「古事談」・続古事談、岩波書店) は、川人が「貞観以後の壬午の年に、聖人が生まれるだろう」と勘文に記した。

貞観四年が最初の壬午の年であり、長久三年(一〇四二)の壬午の年に藤原師実が誕生している、といった内容である。しかし、この勘文に該当するものは確認出来ない。

(19) 『江談抄』神泉苑修請雨経法事(新校群書類聚本) には、「(前略) 陰陽師滋岳川人勤_二五龍祭。今度殊同成精之度云々。」と

あり、後世において安倍吉平が同じく五龍祭を行っている。

(20) 村上知美氏「桓武から仁明朝における陰陽寮の活動につ

いて『宗教民俗研究』十一、二〇〇一年)

(21) 山下氏注(14) b論文

(22) 木村茂光氏『国風文化』の時代』(青木書店、一九九七年)

(23) 山下氏注(14) a論文

(24) 多田圭介氏「春澄善繩―「承和期」の学者―」(『皇學館論叢』四十四(三)、二〇一一年)

(25) 注(23)に同じ。

(26) 繁田信一氏「平安貴族と陰陽師 安倍晴明の歴史民俗学」(吉川弘文館、二〇〇五年)

(27) 本論にいう「公的」とは、天皇が病気の場合、もしくは

世間で疫病が流行している際に行った場合とする。「私的

とは個人が自分自身(またその家族や近親者)のために行った場合とする。この基準は先学と同じものとする。ただし、先学はその線引きを明文化されてはいない。また、

【表4】のように鎌倉期以降は朝廷と幕府が存在するため「公的」「私的」の概念自体が変化するとおもわれる。そのため、鎌倉幕府が開かれて以降は「公的」「私的」の線引きは困難となってくる。

き

(28) 小坂氏「祭・祓と陰陽道の祭祀部門」(『陰陽道叢書』四、名著出版、一九九三年)

(29) 繁田氏注(26)論文

【表4】鎌倉時代以降の鬼気祭・四角四堺祭の諸例

番号	年号(西暦)	月日	祭祀の表記	内容	公・私	典拠
1	建久5(一一九四)	2・23	四堺祭	四堺祭使について	公	壬生家文書
2	同	8・4	四角四堺御祭	日時に関する宣言	公	壬生家文書
3	同	閏8・1	四角四堺祭	日時に関する勘文。同月7日に行う予定	公	壬生家文書
4	同	閏8・4	四堺御祭	会坂・竜花・大枝・関戸の四か所で行う	公	壬生家文書
5	承元2(一一〇八)	4・19	四角四堺御祭	来月6日に行う予定	公	壬生家文書
6	同	5・6	四角四堺御祭	陰陽頭賀茂宣平以下八人が行う	公	猪隈関白記

陰陽道祭祀の一考察―鬼気祭・四角四堺祭を中心に―(宮崎)

21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7
建長4(一二五二)	同3(一二四五)	同	同	同	寛元2(一二四四)	同	嘉禎元(一二三五)	同	同	安貞2(一二二八)	同3(一二三二)	寛嘉元(一二二九)	元仁元(一二二四)	承久2(一二二〇)
8・6	7・13	5・26	5・26	5・20	5・18	12・21	12・20	11・22	11・20	11・18	5・4	3・5	12・26	5・10
鬼気祭	四角四堺鬼気等祭	四方四角等祭	鬼気祭	鬼気祭	鬼気祭	鬼気祭	四角四境祭	鬼気祭	鬼気祭	鬼気祭	四角四堺鬼気御祭	鬼気祭	四角四境鬼気祭	鬼気之祭
宗尊親王の御悩のため、安倍為親が行う	武蔵国の御第にて行う	若君御前の病のため、郭外の八方位で行う	若君御前の病のため、鬼気祭が七座行われる	將軍御方のために安倍国継が行う	九条頼経の病のため行う	安倍親職が行う	東・南西・北西と他四か所で行う	九条頼経の病のため、御所の北東・南	夜に、主計頭賀茂宣俊が行う	陰陽頭安倍泰忠が行う	近衛家実の齒痛のために主計頭賀茂宣俊が行う	夜に行う	祇園の示現に、巽の方角で鬼気祭を行うべしとあり	東宮の御温気のため、安倍泰基が行う
私		私	私	私	私	私	私	私	私	私				公
吾妻鏡	吾妻鏡	吾妻鏡	吾妻鏡	吾妻鏡	吾妻鏡	吾妻鏡	吾妻鏡	猪隈関白記	猪隈関白記	猪隈関白記	吾妻鏡	吾妻鏡	吾妻鏡	玉薬

36	年月日未詳	四堺祭	四堺祭使の交名		壬生家文書
35	宝徳2(一四五〇) 5・2	四角四堺祭	天下で疫病流行のため、皇居の四角(北東・南東・南西・北西)と四堺(会坂・龍花・大枝・山崎)で行う		康富記
34	同	四角四堺鬼気祭	天下の疾疫のため行う	公	後深心院閨白記
33	同	四角四堺祭			後深心院閨白記
32	同	四角四堺祭	祭料不足のため、延引する		後深心院閨白記
31	延文5(一三六〇) 5・6	四角四堺祭	天下の病のため、道嗣が10日に行われる四角四堺祭一座分を沙汰す	公	後深心院閨白記
30	同	鬼気祭			園太暦目録
29	同	四角四堺祭	安倍親宣の申し出により行う		園太暦目録
28	観心2(一三五一) 6・8	四角四堺鬼気御祭	四角祭と郊外四堺祭を同日同時刻に行う		壬生家文書
27	同	内裏四角郊外四堺鬼気祭	祭日時に關する勸文。疫病流行のため行う		壬生家文書
26	正和3(一三一四) 2・1	四角鬼気祭	夜に行う	公	花園天皇宸記
25	正安2(一三〇〇) 6・10	四角四堺御祭	疱瘡流行のため、先例により行う	公	師守記
24	同	四角四堺御祭	世間の病事のため	公	師守記
23	正応2(一二八九) 6・2	四角四堺鬼気御祭	世間の病事のため	公	師守記
22	同	四角四境鬼気祭	後深草天皇の御惱事のため、安倍晴賢・安倍晴茂・安倍為親・安倍晴秀・賀茂以平・晴盛・安倍茂氏が行う	公	吾妻鏡

44	年月日未詳	四角四堺御祭	祭大使枝の交名で。四う角は北東・南東・南西・北西の方角、四堺は会坂・竜花・大枝・山崎で行う		壬生家文書
43	年月日未詳	四角四堺鬼気御祭	勅使の交名。四角は北東・南東・南西・北西の方角、四堺は会坂・竜花・大枝・山崎で行う		壬生家文書
42	年月日未詳	四堺鬼気御祭	祭使等の歴名。会坂・竜花・大枝・山崎の四か所で行う		壬生家文書
41	年月日未詳	四堺祭	竜花で行う四堺祭の陰陽寮官人交名		壬生家文書
40	年月日未詳	四堺祭	山崎で行う四堺祭の陰陽寮官人交名		壬生家文書
39	年月日未詳	四堺祭	大枝で行う四堺祭の陰陽寮官人交名		壬生家文書
38	年月日未詳	四堺祭	花・大枝・山崎の四か所で行う		壬生家文書
37	年月日未詳	四角四堺御祭	陰陽寮官人の交名		壬生家文書

〔附記〕

小論の執筆にあたっては、清水潔先生をはじめとする諸先生方のご指導とご教示をたまわった。末尾ながら、ここに厚くお礼申し上げる次第である。

(みやざき まゆ・)

皇學館大学大学院博士前期課程国史学専攻)